栗ヶ沢バプテスト教会

2024-05-26 主日礼拝説教

「思いわずらうな」

マタイ 6：25-31

木村一充牧師

新約聖書の中で主イエスが語られる神の国のメッセージには、パレスチナの自然、とり分けイエスの郷里ガリラヤの豊かな自然や風物が、その題材としてしばしば引用されます。本日お読み頂いたマタイ福音書 6 章でも、「空の鳥、野の花を見よ」という大変よく知られたイエスの言葉が登場いたします。先ほど歌われた聖歌隊による賛美もそうですが、私たちが折に触れてこの箇所を思い起こすとき、通常はこのマタイ福音書に従って「空の鳥、野の花を見よ」との言葉を共通の言い回しとして用いることが多いのではないでしょうか。その際に、私たちがおよそイメージする事柄はおそらく次のようなことです。すなわち、主イエスは間近に迫った神の国の到来に備えて、ひょっとするとそれが実現するまでに全イスラエルを回り切れないかもしれないという切迫感に駆られながら、足早に各地を巡回して伝道しておられた。そのような中で、ふと足を止め、悠然と空を舞う鳥を発見し、その視線を高く澄み渡った空に向けて、しばしの感慨に浸られたのではなかろうか。或いはまた、その次には緑の野に目を移し、そこで普段は見過ごしてしまうような可憐な花を見つけ、その美しさに驚き、心洗われるような思いになられた。主はこのような自然の再発見、自然との出会い、ふれあいが大事だとお語りになる。それゆえ、あなたがたも忙しい日常生活の歩み、仕事の現場から離れて、時には、空の鳥、野の花を見つめ、かつそれを愛でる。そのような心のゆとりを持ちなさい。主イエスはここでそんなふうにおっしゃっているのだ。多く人は、そのように本日のイエスの言葉を理解しているのではないでしょうか。もちろん、こうした読み方をすることは可能ですし、そのような解釈が間違っているということでもありません。

しかし、このような本日のマタイ 6 章の「空の鳥」が、共観福音書と呼ばれる同じ内容を記すルカ福音書の並行記事、12 章 24 節をよむと、「烏（からす）」となっていることに私どもは驚かされるのです。烏（からす）という鳥は、とても頭がよい鳥で、クルミの実を自動車の車輪に引かせ、それを割って中身を食べると言います。烏（からす）は、人間の顔を覚えるという人もいる。古代ギリシャでは、この鳥は神話の中でゼウスの使者という大変名誉ある地位を与えられていたそうです。しかし、ユダヤの社会ではそういう見方はされませんでした。旧約聖書レビ記によると、烏（からす）はフクロウやミミズクと並んで汚れた鳥とみなされ、決して食べてはならない鳥とされました。不浄な鳥として人々から敬遠され、近づくことさえ禁じられたのです。現代のわが国でも、あの真っ黒ないでたちからして、どことなく不吉なイメージがあり、ゴミをめぐる報道でも烏（からす）は撃退されるべき鳥としてやり玉にあげられています。

一方、もう一つの「野の花」ですが、ほかの聖書で訳されているように、原語では確かに「百合」と訳すこともできるのですが、むしろこのあと「今日は野にあって、明日は炉に投げ入れられる花」とあることから、どう贔屓（ひいき）目に見ても、人々がその美しさに心を奪われ、うっとりとして思わず手折ることすらも憚（はばか）られような、そのような綺麗な花であると読み取ることは、困難なように思われます。むしろ、雑草に近かったのではないでしょうか。ちなみに、新井献という新約学者は、イエスがここで語られる「野の花」とは、アザミのことを指していると言います。その可能性が高いと新井氏は言う。その理由として、旧約聖書でアザミは「茨とあざみ」というふうにワンセットで登場し、どちらもマイナスイメージを持っていること、ソロモンが着飾った高貴な服という言葉を使う際に、アザミの紫色が連想されていること、さらに茨とアザミは、いずれも枯れると同時に炉に投げ入れられ、燃料にされたことを挙げています。いずれにせよ、よほど注意して見なければその美しさに気付くこともなく、たった一日だけ花を咲かせた後、日干しにされ、燃料にされてしまうような名もない雑草、それが主イエスがここで指差し、目を留めて見ることをせよと呼びかけておられる野の花であったと、私も思うのです。

烏（からす）にせよ、名もなき雑草にせよ、これらは共に当時のユダヤの人々には振り向くことすらしてもらえなかった動植物であり、いわば「見失われていた存在」でありました。しかし、主イエスはそのような被造物にもゆるぎなく確固として注がれている神の恵みを見て取ります。人々が目を向けようともしない、そうする価値すらないと思われていた動植物、さらに被造物全般に再び目を注ぎ、聴き手であるユダヤの人々にもそのようにせよと呼びかけたイエスのメッセージは、当時の人々の常識に正面から対立するような強烈な逆説性をもっていたことは間違いありません。

さらに読み進めます。空の鳥のことを説明する 26 節以下で「種を蒔く」「刈り入れる」「倉に納める」という行為が挙げられていますが、これらはすべて当時の成人男子が行う労働行為でありました。一方、続く 28 節に記される「野の花」のことを説明するコメントとして「働く」「紡ぐ、織る」は女子の労働を指し示します。イエスの時代のパレスチナでは、人口の 90%が農業労働者で、その経済はほとんど自給自足の経済でした。経済とは、そのまま「家の経済」のことであり、家庭の中にある資産を目いっぱい活用して家計の足しにすることが何よりも価値があることだと

考えられていたのです。ところが、主イエスによると、その指をさし目を注いで見なさいと言われる鳥や花は、皆さんがたが血眼になって、生きるか死ぬかの問題として関わっている日々の労働を一切やっていませんよ、と大胆に言い切られるのです。このようなイエスの言葉は、その日その日を精一杯生きていた、大部分の人が貧しかったユダヤの社会の中では、ほとんど衝撃的ともいうべきインパクトをもって受け止められたのではないでしょうか。人々はイエスの言葉に驚いた、驚嘆したはずです。

ここにおいて、主イエスのメッセージは次のように響きます。「あなたがたが嫌っている烏(からす)でさえ働きもないままに現に生かされて生きているではないか。また、あなた方が目を留めることもなく刈り取ってしまう野の雑草も、何一つ働きがないままに生かされ、しかもよく見ると、可憐な花をつけているではないか。」そして、このことはすなわち、これを聞く私たち人間も同じであることを示します。人間の命も働きによるのではない。それ以前に、すでに生かされてしまっている命の中にあるのだということです。働きによらない既に生かされてしまっている命…、主イエスのこのメッセージは、イエスが生きた時代にあって、神の国に入ることを人間の側からの行為、すなわち律法の行いという業績によって勝ち取ろうとしたファリサイ派の人々や律法学者たちの唱えた価値観と、真っ向から対立するものでありました。

「既に生かされてしまっている命」、この受身形（＝受動態）で言い表される命こそ、この朝私がもっとも強調したい事柄です。私たちのうち誰一人として自分が生まれた時のことを覚えていません。また、私たちの誰もが死というものを体験することができません。言ってみれば、私たちは生まれ出でたその時から召される時までの中間時を生きている。いや生かされているのです。同じような所に住み、同じようなものを食べ、同じような服を着て暮らしている。それなのに、日々の生活の中で、ある人は与えられた仕事を喜び、人との関わりを喜び、感謝の毎日を生きることができているのに、別の人は不満やストレス、隣人とのいさかいの中で、喜びのない日々を生きているとすれば、いったいその違いはどこから来るのでしょうか。イエスの眼差しによれば、それはおそらく「すでに生かされている」というその根源的事実に対して、絶対的な、無条件の感謝があるかどうかではないかと思うのです。

確かに、私たちの人生には理不尽なことがあります。なぜ自分はこんな境遇に生まれたのか。なぜ自分だけこんな辛い目に遭うのか。どうして自分にだけ割の合わない役が回ってくるのか。数えればきりがありません。いくつもの不満が湧いてくる。しかし、そんな自分自身と仲直りをして、和解をして、こんなちっぽけな自分を愛し、生かしてくださる神の恵みの大きさに早く気付きない、その恵みを数える者になりなさいと主イエスは言われるのです。

「思い悩むな」と本日の箇所で、イエスは語られます。なぜ、私たちは思い悩むのでしょうか。それは、私たちが自分自身や自分の生活を受け入れることができないからです。今の自分を受け入れられない、不満や満たされない思いしかない。自分と他の人を比較し、劣等感を抱いたり、嫉妬の念にかられる。しかも、それが一日終わらず、次の日にも持ち越すのです。そのような負のスパイラルから抜け出すためにはどうすれば良いか。それは今の自分を受け入れることです。自分や自分の周りを責めず、足りない部分を嘆くのではなく、むしろ今与えられている環境や境遇を喜び、それを受け入れるのです。なぜなら、私たちは今生かされているのではありませんか。その命、生を喜ぶのです。「一日の苦労は一日で十分である」とは、どんな苦労や重荷も神さまが共にいて、あなたの労苦を共に負うてくださっているということの裏返しの表現です。

最後に、一つの詩を皆さまにご紹介してメッセージを終えます。「まどみちお」という詩人の名前を皆さん、ご存じでしょうか。童謡の「ぞうさん」の作詞家として知られる人です。この人は、表現の前に存在があるという意味で「存在の詩人」と呼ばれた人です。

「ぞうさん/ぞうさん/おはながながいのね/そうよ/かあさんもながいのよ」

おおらかさとユーモアをそなえた詩ですね。この人の詩に「ぼくがここに」いう題の詩があります。それほど長くない詩ですから、それを全部をお読みします。

「ぼくがここにいるとき/ほかのどんなものも/ぼくにかさなって/ここにいることはできない。
もし、ゾウがここにいるならば/そのゾウだけ。マメがいるならば、
そのひとつぶのマメだけしか、ここにいることはできない。
ああ/このちきゅうのうえでは/こんなにだいじにまもられているのだ。
どんなものが/どんなところにいるときも
その「いること」がなににもまして/すばらしいこととして」

ここにいることが何にもましてすばらしいことだ、とこの詩人は訴えます。主イエスが語られた神の国は、私たちの存在を、それだけで、そのまま全てを受け容れ、愛して下さるお方を指し示しています。だからこそ「思い煩うな」という御言葉(みことば)に従い、神さまに委ねて生きることの大切さを思うのです。

お祈りいたします。